

〈文献紹介〉香川貴志(2010) 『バンクーバー
はなぜ世界一住みやすい都市なのか(叢書・
地球発見 14)』ナカニシヤ出版 196p

KOHARA, Takeaki / 小原, 丈明

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2011-03-22

【文献紹介】

香川貴志 (2010)

『バンクーバーはなぜ世界一住みやすい都市なのか (叢書・地球発見 14)』

ナカニシヤ出版 196p

現在、評者は初めて地誌学関係の講義を担当しているのだが、地誌学という分野を教えることの面白さとともに難しさを実感している。地誌学には系統地理学における総合的な理解が不可欠であり、教員にとっては多様な知識や経験が要求される。それ以上に、講義内容を如何にリアリティのある形で学生に教授するのが求められるといえよう。教員といえども講義で教えるすべての地域を訪れているとは限らないし、すべての事象を見聞しているとは限らない。とりわけ、評者のように経験の浅い教員にとってはなおさらである。

さて、上記のような難しさを実感している評者にとって、ここで紹介する書籍は非常に示唆に富み、「このようにすればリアリティのある授業ができるのでは」、という印象を抱かせてくれる。地理学を学ぶ者にとっては本書から得られる点が多いと考える。

著者は都市地理学を専門とする研究者であり、都市開発や都市構造の研究、とりわけマンションの開発や住民属性について多くの業績を挙げている。本書は、著者が1995年夏から1年間の在外研究によりバンクーバーで生活し、その後も毎年のように調査で当地を訪れた経験が基となっている。それゆえ、単に観光で訪れるだけでは窺い知ることのできない、生活者の視点からの様々なエピソードが平易な文体で記されている。つまり、本書は多様な読書層を想定して書かれた一般書に位置付けられよう。とはいえ、著者ならではの視点も随所に散りばめられており、地理学、特に地誌学や都市地理学の専門的な知見も得ることができる。

本書を紹介するにあたり、まず、誰もが問い掛け調の書名に興味を抱くのではないだろうか。評者はバンクーバーを訪れた経験があることから、その時の印象を思い出しながら本書を手に取り、その問いの答えを探そうとした。また、本書の刊行年を見て、勘の良い方はピンと来ると思うが、冬季オリンピックの開催で注目されるのに合わせて、本書を紹介しようとした著者の意図が伺える。

本書の構成は、
序章 バンクーバーとは
 どういう都市か？

- 第1章 バンクーバーへのいざない
- 第2章 動く、乗る、楽しむ
 ―乗ってみたい珍しい乗りものたち―
- 第3章 バンクーバーへのエッセンス
 ―ダウンタウンとスタンレーパーク―
- 第4章 都会の中のアオアシ
 ―フォールスクリークとその周辺―
- 第5章 ぶらぶら、らぶらぶ、市街地
- 第6章 郊外へ
 おわりに

となっている。

各章題から、本書はバンクーバーの各地区に関する観光案内のような印象を受けるかもしれない。しかし、一見すると何気なく配されている各章の構成には、地理学的な配慮がなされている。詳しくは後述する。

まず、序章ではバンクーバーの特徴が簡単に紹介されている。バンクーバーは「世界生活環境調査ランク付け」において、2009年は世界第4位、2000年前後の数年間は世界第1位であったことが示されている。もち

ろん、本書の書名はこの事実に関心しているのであるが、著者はそのような当地に対する高評価の要因を生活者の視点で捉えることで、書名の命題の答えが得られるとしている。

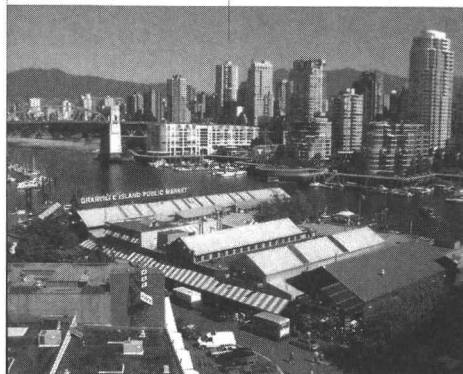
第1章ではバンクーバーの自然地理学的な特徴やバンクーバーの歴史、都市開発、そして居住者の属性からみた社会的側面についてなどの基本事項が整理されている。これらの内容は著者の体験が軸となっており、知識の中での当地の気候(西岸海洋性気候)と実際に体験した上でのズレを通じて、「百聞は一見にしかず」、「地理学者、見てきたようなことを言い」(ともに本書12ページ)と述べているが、この部分に地理学教育者としてのあべき姿が示されているといえよう。

次に、第2章ではバンクーバーの乗り物(鉄道、船、自転車)に焦点を当てている。各



香川貴志

バンクーバーは なぜ世界一 住みやすい 都市なのか



ナカニシヤ出版

交通機関の運行方法や運賃、設備、乗り降りの習慣、乗車・乗船中に見える風景など当地で過ごして初めて知り得る情報が紹介されている。とりわけ、鉄道(スカイトレインとウェストコーストエクスプレス)についての情報が豊富である。著者自身も自認しているように、「鉄っちゃん」としての視点が多いが、もちろん地理学者としての視点でも当地の交通事情や都市発展の状況、各地域の特色・景観について様々な事象が論じられている。

第3章から第6章にかけては、バンクーバー市街地内部や郊外の各地区について紹介されている。第3章ではCBDおよびその周辺、第4章ではインナーシティ、第5章ではダウンタウンから少し離れた各地区、そして第6章では郊外の各地区について記述されている。以上のように、都心部から郊外へと順に紹介されており、地理学的な視点が盛り込まれている。バージェスによる都市の同心円構造モデルに当てはめると、都市の核となるCBD(本書の第3章)、その外側の遷移地帯や低級住宅地区(第4章)、それに続く中級住宅地区や高級住宅地区(第5章)、そして縁辺部の通勤者住宅地区(第6章)となり、著者が都市構造を意識して本書の構成を組み立てているのが読み取れる。

このような都市構造上の差異に起因するが、各章で描写されている各地区の事象には特色がある。順に見ていくと、第3章のCBDとその周辺地区は都市形成史上で比較的長い歴史を有する場所であることから、それぞれの歴史性に焦点が当てられている。バンクーバー発祥の地であるにもかかわらず、後に中心地が移動したギヤスタウン、そのギヤスタウンから街の中心が移動してきたシンクレアセンターなどが解説されている。個々の地区が経験した歴史を理解することで、現在目にすることができる事象の背景や要因が理解できよう。

第4章ではフォールスクリーク沿岸部やグランビルアイランド地区の変容といった、いわゆるインナーシティの再生が紹介されている。本章で言及されている地区は、かつては製材所などの工場群や倉庫街が形成されていた場所である。そのような地区が再開発により業務地区や住宅地区、あるいは観光地として再生を果たしてきたプロセスが紹介されており、第3章とともに、都市の動態的な側面が述べられている。

次の第5章では、「都心でもなく、郊外でもなく、その中間部に位置する一種微妙な場所」(本書141ページ)であるシティスクエアや、その近隣のザ・クレセントと呼ばれる高級住宅地区が紹介されている。ザ・クレセント地区は大邸宅が建ち並び、先のフォールスクリーク沿岸部の住宅地区とは異なる景観が示されている。

また、本章ではバンクーバー市内にある様々なエスニックシティについても記されており、これらの地区も周辺との差異が認められる特色のある地区として紹介されている。チャイナタウンには文字通り中国系住民が多く、近年では居住地域を拡大させてきている。著者はそのような現状を歴史的経緯や社会経済の動向と関連させつつ、都市空間への影響について指摘している。また、イタリア系住民やインド系住民、ギリシア系住民が多い地区にも言及し、コスモポリタンシティとしてのバンクーバーの性格を明らかにしている。

第6章では、かつてはブリティッシュコロンビア州の州都であったが、現在は衰退傾向にあるニューウエストミンスターや、自動車販売店が集積し、ディーラー街を形成しているオートモール、そして日本人が植民し、現在でもその痕跡が残るスティーブストンといった特色のある郊外地区が採り上げられている。これらの地区を紹介することにより、バンクーバーを広域的な視点で捉え、バンクーバーと郊外地区との関係性に留意する著者の意図も読み取れる。

以上、各章を詳しく見てきた。改めて、地誌学的要素や都市地理学的要素、地理教育学的要素に富む本書の性格が指摘できる。特に、都市構造や都市圏構造、インキュベーション機能、歴史的地区の保全、ジェントリフィケーション、都市再開発、セグリゲーションといった都市地理学における重要な事項が解説されており、都市を学ぶ上での最適なテキストといえよう。

最後に、1点注文を付けたい。本書ではバンクーバーの様々な地区が紹介されているため、読者は頻繁に地図を参照する必要がある。第1章中の異なるスケールの3つの図と文章とを交互に見つつ読み進めていくことになるが、それらの図は本文中にあるため、各図を参照するのがやや困難である。それゆえ、図を巻頭や巻末にまとめた方が読者にとっては読みやすいのではないかと思う。

前述したように、本書は一般書の体裁・形式をとっているが、地誌学や都市地理学のテキストとして位置付けられる。しかし、それ以上に、著者が自らの実体験を通じて、地理学の面白さを読者に伝えようとしている点にこそ本書の価値があり、このような姿勢が読者にリアリティを伝えるのではないかと考える。この点を、評者にとっての模範として今後見習っていきたい。

(法政大学 小原 丈明)